

寄稿

こどもと文化って？

札幌市こども人形劇場こぐま座・中島児童会館
館長 柴田 由香

「こどもに文化を伝えるってどうすればいいんですか？」

ちょうど1年前、「こぐま座・中島児童会館」への異動が決まった時に、それまで勤務していた児童会館の地域の方から質問された言葉です。「触れてみるが一番！」と答えのようで答えになっていない曖昧なことを言いつつその場をしのいだような気がします。そもそも「こどもの文化」とは一体何なのでしょう。これまでの自分の経験を振り返りながら考えてみました。

AIが示すところによれば、文化とは、人々が生活の中で自然に身につけた「考え方」「習慣」「暮らし方（衣食住）」「芸術・技術」などの総体とのこと。ということは、時代の変化に伴って蓄積されたり、変わっていくものようです。確かに、半世紀以上昔の私のこどもの頃と今のこどもたちとは、あそび方や価値観をはじめ、全てが異なると言っても過言ではないほど大きな違いがあります。スマートフォンはおろか、テレビゲームすら普及していなかったその時代は、今とは全く異なる文化的な土壌を持っていました。

例えば、私の小学生時代のあそびと言えば、友達とのあそびは基本屋外で、おにごっこや缶蹴り、三度ぶつけに石けり、ゴム飛び。その辺にあるものを使って、自分たちでルールも考えながらあそんでいました。近所の商店にヨーヨー名人がやって来て見たことのない技に目を奪われたこと。年に一度小学校にやってくる劇団による芸術鑑賞会にワクワクしたこと。家の中では新聞紙や空き箱で得体のしれない物を作ったり、ぬりえやきせかせえ人形であそぶ。散々あそんだ後、夕方にテレビでアニメや連続人形劇を楽しみ、終わる頃には夕食の時間で「一日が終わったなあ」と感じていました。学校、地域、そして家庭というあらゆる場所で、自分から積極的に「得よう」としなくても、半ば強制的に「こどもの文化」に触れる機会が、どこにでもゴロゴロと転がっていました。こうした体験で、小さな物事から喜びを見出す感性や他者への共感性等、人として必要なことを知らず知らずのうちに学んできたのではないかと、今になって思います。

そんな私が大人になり、初めて勤めたのは札幌から2時間ほど離れた人口5000人程度の小さな町でした。夏になると町をあげて開催されるお祭りがあり、その日だけは人口が倍になるほど盛大なものでした。それまで私が経験した出店を楽しむ消費的なお祭りではなく、こどもも大人も町民が一丸となり、何か月も前から準備をして当日を迎えるものでした。大人たちは山車の作り方や引き方など

といった伝統をこどもたちに熱心に伝え、こどもたちはお祭りの主役ともなる、半天姿の若者たちに憧れを抱きます。そして、見様見真似で声を出し、観衆をあおり、祭りの熱狂を作り上げていくのです。大人もこどもも、目をキラキラと輝かせて迎えるそのお祭りに、私自身も見様見真似で参加しました。その時味わった、これまでに経験したことのないような地域との一体感や、何かを成し遂げた達成感、現代のデジタルな繋がりでだけでは決して得られない、「生きた文化」の力だったのではないのでしょうか。30年以上前の経験が今でも色鮮やかに思い出されます。

今、デジタルを基盤とした新しい時代を迎えており、その変化のスピードは驚くほどの速さでこれからも進んでいくことでしょう。私のそんな経験から、こどもたちに伝えたい大切なこと、人が健全に成長するために必要な基礎的な体験は、「アナログ」の中に深く根ざしていると思います。ここでいう「アナログ」とは、単に古いものという意味ではありません。それは、五感すべてをフル活用して多様なことを体験し、脳と心、そして身体の調和をはかりながら成長していくための、大切な要素のことです。こぐま座で舞台から伝わる息づかい、聞こえてくる声の響き、温度感、光と影なんかもデジタル画像では得られない、見ている側の想像力を刺激する深い奥行きを持っています。心と記憶に自然と刻まれていく普遍的なアナログ体験が文化となっていくのではないかと思います。こどもの頃から物怖じせず、色々な物事に直接触れる事こそ「こどもの文化」ではないかと考えました。

こぐま座は今年50周年という大きな節目を迎えます。併設する中島児童会館は77周年。どちらも公立で初めて設置されたこどもの文化の拠点です。時代が変化し環境が移り変わる中で、どんなに少子化となってもこどもたちは存在します。これまでの歩みと、社会の中で果たしてきた両施設の役割を丁寧に振り返り、こどもたちにとってかけがえのない大切な場所であり続けるためにも、次の50年に向けて何ができるのかを深く考えていく機会にしていきたいと思います。

人形劇を通して「文化」という大切な宝物を後世につなぐ、そんな素敵な「こぐま座・中島児童会館」で働けることに感謝です。

柴田 由香 (しばた ゆか)

1970年千歳市生まれ数年海外の札幌育ち。
平成5年、札幌市非常勤職員として児童会館で勤務をはじめから、これまで市内児童会館や男女共同参画センター、市民活動サポートセンターでの勤務を経て令和7年4月よりこども人形劇場こぐま座・中島児童会館館長として着任。ハンドボールで国民体育大会出場経験があり、頭より身体を動かすことで物事を覚える傾向がある。屋内より屋外での活動が好きで休日のほとんどを季節問わずキャンプを楽しむ。



ひらけごま!

【第1回】 ～お母さん歴10年人形劇に心奪われるの巻～

春になり、進級の季節。子どもたちは3歳、7歳、9歳。私も母親業10年目に突入となった。この10年間、子どもたちが居るからこそ見れた、出会えた瞬間がたくさんある。こぐま座、やまびこ座との再会もその一つだ。異年齢の子育ての休日は仕事をする平日よりも大変と感じていたとき、保育園に来てくださる人形劇の話を子どもたちが楽しそうに話してくれたなあという記憶から、「人形劇を観に行こう!」とやまびこ座へ向かった。目の前にはスーパーもあり、木のおもちやもあり、絵本もある。「これは半日持つな」と時間の構成を感じつつも、目的の「人形劇」に心を一番奪われたのは私だった。正直泣きそうだった。対面する空間に、繰り出される物語、生の声と生き生きとした人形たち。それを見つめる

私たち。世界のなかで一番平和の場所なのではないか!と心が安堵した。劇後に人形を触らせてもらい、持たせてもらい、作り手に触れて世界が広がる感じ。これだ!と自分が子育ての中に求めている感覚が一気に押し寄せてきた。その後、札幌祭りではこぐま座で靴を脱ぎ、鑑賞した腹話術に3歳児がヒットした。笑いすぎ。やまびこ座のお祭りでは、お化け屋敷を体験し、この本気はなんだ!とお化けに驚かせられるのと合わせて2度ビックリした。そこには良い顔の人たちがたくさん居た。まさに「生きる」を堪能している人たちだ。私たちの視点を開き続けてくれる「こぐま座とやまびこ座」はまさに心のひらけごまをしてくれた。



深澤 梨恵(ふかさわりえ)

1985年札幌市生まれ。2009年9月より、札幌オドオリ大学 学長として活動をスタート。2012年9月にNPO法人化。2020年1月に株式会社ひらいてつくるを設立し、現在は通常の事業所や企業で働くことが困難な方に、就労機会や生活活動機会を提供する就労継続B型事業所オープンドアを運営中。2023年9月に母親が立ち上げた介護施設を運営する有限会社アイを承継。仲間と家族に支えられながら日々を暮らす三児の母。



の家に全然似合わない姿で、小さいコップはそこにいた。分厚いガラスは少し黄ばんでいた。「、これ、まだあるんだね」私は思わず笑った。「うん、なんか捨てられなくて」みきちちゃんも笑った。

ようやくここはみきちちゃんの家だと感じられた。麦茶のコップは時間を重ねた姿のまま、居心地が悪そうにここにいる。そうだよ。二階のみきちちゃんの部屋で絵本を読んでおやつを食べた時間は、確かにここにあったんだ。



おおきな きがほしい
文:佐藤さとる/絵:村上勉/偕成社

かとう まふみ

絵本作家。影絵や人形劇が好きで、自分でも制作する。主な作品に、『ぎょうざのひ』（偕成社）、『しゃもじいさん』『ぬかどすけ!』『みそこちゃん』（あかね書房）、『ねこぎちのてぬぐい』『まんまるいけのおつきみ』（講談社）、『おりがみのしろちゃん』『のりのりこさん』『けしごむのゴムタとゴムゾー』（BL出版）、『おもちのかみさま』『よつばのおはなし』（佼成出版）、『かたつむりくん』（風濤社）など。

お問い合わせ
お申し込み

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからご覧いただけます。

思ひ出
えほん手帳

第1回

甘い麦茶と『おおきな きがほしい』

20代の終わり。絵本を勉強しに上京して、編集者さん主催の絵本塾に通いはじめた。塾の最初の日のこと。自己紹介の中で「一番好きな絵本」を発表するように言われた。私は『おおきな きがほしい』（さとうさとる作）をあげた。一番好きな絵本だけど、うちにはなかった。友達のみきちちゃんの家で読んで好きになった本だ。みきちちゃんは小学校に入学して最初にできた友達。毎日のように一緒に遊んだ。みきちちゃんの家に行くたびにその本を読んだ。絵本の主人公はかおるくんという男の子。ストーリーは、ほぼかおるくんの想像の世界。大きな大きな木の上に小屋をたてて、小屋に遊びに来た鳥やりすと遊んだり、ホットケーキを焼くのだ。(ああ、私も大きな木の上に小屋を建てよう。ホットケーキも絶対焼くんだ!)本気でそう思った。

みきちちゃんの家でのもう一つの楽しみは、おやつ。家では食べられない甘いおやつが出るのだ。ある日、おやつと一緒に麦茶が出た。

私は大喜びでおやつを食べてから、麦茶を飲んだ。びっくりした。「甘い!どうして麦茶が甘い?」「お砂糖入ってるからだよ」「なんで?」「ふつうだよ」「へんだよ」「へんじゃないよ!」

のちに甘い麦茶の家があることを知ったけれど、私は甘い麦茶だけではどうしても受け入れられなかった。麦茶はいつも小さな重いガラスのコップで出てきた。私はそのコップにジュースが入っていたら飲むけれど、麦茶の時は飲まなかった。

大学を出て仕事を始めた頃、みきちちゃんの家が建てかえられた。すぐ立派できれいな家になった。久しぶりにみきちちゃんの家に行った。場所は同じだけれど、違う家みたいだった。なんだか落ち着かない。「何か飲む?」「うん」

2人で台所に行った。台所もきれいで、何もかも新しい感じだ。シンクの上に見覚えのあるものがあつた。あの麦茶のコップだ。新しいそ

編集後記

過去を振り返ると、楽しかったことはもちろんのこと、辛かったはずのことも苦くも笑い話として記憶に残ることが多く、記憶力の不思議さを感じます。振り返ることは過去を見るだけでなく、未来を動かすためのものさすです。こぐま座50周年。こどもも大人もドキドキワクワクする色鮮やかな記憶に残る公演をたくさんお届けする予定です。この夏のこぐま座に、ぜひご注目ください。(柴田)